中村俊定文庫
文庫 18
21

明
後

全

## 明境

なほ歌の道も連歌も古風をつたへ侍るべし。詩の
はとをはへ侍る事は遠波を形容とし
はれはいろ〳〵の物語を侍りて事の要をえ
はとりてもこれを詩歌にあつめ侍りしはこれ
第一の方の功業

あいう（歯唇）　へ（舌）を（喉）
かきくけこ
さしすせそ
たちてと
なにぬねの

はひふへほ
はみむめも
やいゆえよ
らりるれろ
わゐうゑを

第二段

かかうをなる　ひとを
いつまやいかばいてていくしれ
そいつくりつち

是等の言葉八古代仮名遣を移れ

古代仮名遣は語尾の風あるものを使ひきらしとふ
てあるさあるべきものをいふてあるべきものを
いつしかふてあるべきものをいふてあるべきものを
らんかなるべし

第五段

ものをとかへうの方の中ニの歌あるをさへう
けるのまよあるのまものとすりけり
うらはめふむもしるしるをそふ
花をあるのをあつをきあくをを
をのむ
世のなかにきしをなかるに
なにもなかるもうしみ
かりそのもをなるあるべきをくをくしき

もちろへにうつる舟の発句も大宮に浅かといふまじく物を
月をそへしにれをとそふもと見えしかき人ことをと
ろくしくそむし
第二ハそしやとのの人はじめからいはりたるへきことて
むかしおもかげもあるを言ふ人あり家持清輔や家持なる
是ハそをやへのへうるし此句へにかけ付そのひと
しきなり
まつはやをはじめハそれ見へし
素月抄などいふ義の日は拾ハそれまで代を見へて神説説
又やそといふ言葉あり
ふきり満みちぬ人とよしや句 為ひいきして付くべし
やそハいふへきそれとやらみて此句ハ体なし

たとへハ第三
年を経るとも猿のみをしけるおハ若けき者をや隠と言説
山の端ぞきえ藤花らめきいつま連歌の体にハ付けん
此をらひかり但文字なるらしらし字は付てもあるハ
句をとなへし体字をも用ひ句体より付くし
はしあり付とも思へし連歌付とまふしの
これを字数ハきれ字あらし句にかりて其字もかれも
まれし一字をねハ句端きれ字あらし二字をね是
きれ字付くてハあるへからず
第三次第しても去る事
是ハ又のかへりたる
うをにたて

まつ山家の主ハ月見れハやとるへき旅人をまつらん
いかにしてこゝろ安らかにふしよのかたハいとゝさひしからんや川旅
道まよひ入ぬれはこれか草も葉のうへにみちみちたるらん
まつひとり旅人のいつもはれハきよく見えしかもかゝるいへた
きれぬるよりたのきさ舟さ
こゝろにて露のうらをはらへかくして
まつしやハきれたる見れとも草と月とみちける月を
いつかもきれ行
なし原や月もほのめく露おちて
又かしおりてきかりハきれて見し
第四のへくちねる秋さえかりひのたつ秋の夜を見て
うつことをもひいられをとりてこそうちふきね

好忠うた
おこなひ海みち浦千鳥と心をも子とも羽衣けはや人を
たゝまりしけれたもみれは旅人のまへ人をつた
とふてゐえぬうとふりを
云生恵へ入うちこ丹
やつれも草ハたえ旅人きたれをこそ見りよきまちたらん
けふかハもえ旅人の行く草ハすえつきし
俊成にのうちに丹
慕かる秋の庭こそをあれたる侍て旅人家にわかけ
第七そらのきれてみたかすいはる見るをかき消え
折めてこの袖そへ包へ梅花ありてやよてみられきれ
凪そなへ風の吹　かちけれ　かなそれく

いつ世てらさい侍ハ白妙の月ハいつしのて
月てをしへしらしの月ハそ侍るへしらしみ

書きてをもさ丹春の山里ハ初山ハ蓬をもに松虫の侍く
之あ玉くかりと之ふ蛙山
第八こそしふるそハ雨をもてハ春ハ也の玉あてをもる
忘けをてねへめうれしあをこそ兵へ
人をしをかをるをを　思をこそ侍も
えをを移を思ふ　それをこそ見あ
侍をるたの侍う
をよきをさ丹みら
花をを我をを之丹をひしらあてへをを侍
春をを白ふあけるを白ら山を丹ハいを丹見

月をよ月よをを人ををあるしみ
我ををををへ花み　ををを又ををふ
丹ををををふもをあてをあ車侍なり
ををき秘侍をををしみ
無原あをたき川白川や見代をの侍をを見
をたき川のをの玉みは侍ふをを比あつを比を
ある人のふををふををそれををふを侍
をはへらしをををを見へ見たくを多見へし
をれををれよを為の無原　返あれハをを下あを
をハ一日の中く四を見あ
第九　やの玉ハ第
ををあいのやをハ　雪やあやし

じいかたやしハ
うれしきや　をもしろきや
むさしきや　かなしきや
はなみて見てハてきにしとゝかるし
うらふやしハ
それや恨しん　哀や恋しん
すたるやしハ
人とかしきや　色かしきや
祝いのや
これハ色のうちみかり祝ひのや寿たるやうけし
迷やしハ我かきや　道したれや　いとふあれや
冬川のうへハ走られる我ぞれや走りて通て悲しかるらん

これハおかしきもりたるやうし　めやらハ
上ハ句思案しと治定なれともりん付句をもちつけさるめや
第十　ころて　ころハ前之の為にてと沙汰るし
或人の云ところ　そと治りハ　てにをは　にとあはれ
はれたき切字あれハ其前ハ発句に沙汰へきあれハかなるし
かなハ字なり　是ハ切字なし　とは字ハりをおさへて云し
或人の云　これ沙汰りハてきてこれへるし
或人の云　こころりハこれハ体字にてたちなるし
第十一　句の字結事
ふのぬハ　雨ふりきあ　風ハ吹きあ
をりぬハ　水のわきあ　そハこえぬ
めの字のをりて　句の字結ひをきこゆれハおりぬし

はの字のなけしきぬハ子のぬしある人のいゝやうるるはたは
あさみえるし云にの字ハ傳受之んなし
有ちめる月のほそ細山のた　秋色なり
おちる月はひそ江山のた　巳去なり
第十二　多り　なり　流　此てふのき
なり第なりハ流宮ものきし又なりとすれハ
上句及是所りハ所りと為流よ下の句及ハ
不崇慈語のことし且
我思ふ松を時白は答あるきい萬り戸に凡思し
又或人の云　流の字ハ字むしてとよふあれは
をしとせをもして所の絶のあやまり所ん
なるへし

四子は浦に赤出るきれたる白わの所のき竊に君ハ隣宿
隣所の四子の浦の只宗字の両石およにあまつさへ
富士はここ君は隣へ隣くるく所あたとふれて候と
或人の云　此ともを前る紙を右らぬしたとへハ
ちきし思ひ奇し
梅てろ雪小田は子苗や（又苗り）走るらん
かり流し泥しる五月雨の比
或人の云　ほきてふめるてふのてふの字ハて
いふる云ものり
うんちはもなかふてふ答もふやるあ人きき也
基をくまたにりし白鷺は新に見てふ何月はらくすれ
第十三　護命僧正隣流大師は各宗承以ふ

是ハこはいてと数めくると　我也これそつゝ作る人
あるハ物いふ山々も出して可哀覚えて　辞もせきと
是詮なきとして何内意はは仮名文字流ひの
推句とし　表様前句の文字は歌を付る　強ハ
初よりもこきを思ひえ　雅言ハやいまえよの古言なか
よいて本語ないはそくいいもひなき月のかよい
是らふハ和漢のつるそはるいひも上手あ所はく
是川と流るるハうつ去らしく会意言葉辞にかき
らくなし

右十三條之秘傳非斉数以不可授与者也

一　口傳付の秘

船もやく行流の川舟

秋かくまいそ夜道も是猶を
是ハ秋の前句も作る付句秘する秘用もいらぬ作る
流れ行く流を秘することし舟ヲ道と付たる
やく作ると云ハいそのめし付流しとふかくしと存
此辞なりましくしや

一　真草行の三辞の事

真の辞ハてにをはいつくしくきこえ付合て
見えをよく云て付けて前句は秘用をうけ
素細く付所を真とてやらし行の秘ハ前句は
句を字のかて秘の詞を正しくして詞を云流て
句の作残とつゝくて足達寄は時ハ流は道にあるふ
流るみえて句作もきこれぬそのし但句よくそり

ある人ある席にて或人の句を中に倫ある一句有
上手外れしてる毎に遣逸中にも一句あり
多し道を知る成りしてと云し草の花
前句は高会さきから大方の流を見
やかに云ふして又天生又もよくいひそ
去て付様を守る句と云

一　手爾付の辨
移り行ても露の一法より
鳴らぬ月や明方の頃

一　景物の辨
花まづ月又よりへらぬ夕哉
如此句一盛しや景物多入とも　是ミ法を

当年毎にある一座に一句の吉の物と云入れしは
去年よりや座毎に心ざし見へ一つ也

一　発句切字の句
かり　秋の月紅葉も青く成りにけり
せ下知　名も知らぬ草も紅葉で時雨
はし　花は云ふ紅葉は是秋の草
らし　一木はおもしろし新出
へ下知　色付く紅葉ちる木の下紅葉
ぬらし　風も乱れ露に松
け下知　山は霞む花には奇也
め下知　咲きつつ見よ枝かくして花の雪
花の郭公大鳴りしの仕事のみ

百日紅八簾の松を笑の方
角はたをりたりけり

一やとりの事
明はなれ行くまゝ
はるかにいやるるまゝ
ゆくゝゝ初花の外る白
月花の二つうもしくゝ
白
帰てやはもしくゝ今ハ知るらん
地はるはやとなるまゝハ
てるからの歌やの事
板を見るゝやうて
はるゝやうもるを

一
月とまゝ北津
やうれ人やうと夜も深き路
元ハ雪を為てゝ
かゝれ歌ハ人をゝ
てゝを返しし
上白ゝ百月百ゝ
思ゝ
夏はりゝ
一ゝゝゝの發句
松白し見や雪ゝ
ゝ雪ゝ山や雪ゝ
雪を元月や柳枝

一やゝ切〻乱して面
たゝ山路や夏ハ来ぬ
月や行〻めぐりて侍り所〻哀
山や雪ゝ次第帰郷の
一めや ゝゝめ ゝゝ
又雪をそ
一いるさん上ハいるさんより
いゝ ゝん
一初ハ雪ハ初ハ
一かを 山月を
一ゝ月 雪の
一めや ゝゝめ

とゝ
一ゝ
名所の
第一風
ゝ山ゝ
本の
雪ゝ
桂
風や
ゝ山
ゝ

第二 蛾眉を春の山に比しめ
秋の時々山色うつる霞の衣
いつもとそれたる人もなし
年待つ竜や朝ゆふ一はけ
すゑ末霞を染る呉藍
第三 比叡の雪の白妙
を山を神のしゐ明かしの
霞をそれの春はの源を
第四 無垢の雪の白妙
川表は情をうきむ三山の
春の写霞の夕燈を形し
絵をなる絵をやをを紀古柳

春風を春を深をを柳
又やを人形を絵家夕をを
かををけは紀れ霞を神を
絵筆のを家風を形し
時雨をを足はを雪はを
冬川の雪の柳や流はし
第五 雅の年をを山をを霞し
柳の雪を星を霞を夕月秋
いはをを人山をを雪を霞
はをを霞陸の燈の花地を形
柳やを紀はを山をを夕月秋
しきをををさをを竜の五雅

翁曰発句ハ時節の物をよく行扱ふへし
第六ハ頌ハむかしを祝ふなるへし
秋の色精や伐しのあはれくく
しはしやくかしの松の月
右祝詞連哥にも俳諧にも有へし
発句
咲花やよろつ葉ハ源の若葉かな　古人之句
今こそ月ハ入らぬ木陰かな　同
此二句ハなすを推しくらふいひてきこえさるへし
居佛て秋のはうき紅葉にも　同
居々て柳翁清くなりけり那　同
右二句ハ秘し

ゆうしき花ちりてなりふくれ
此ハ外と無き祠なるへし
あやしくと春の日のみゆう玉簾　古人ノ句
あかつきのやと切る句なし
松風を植て出る秋草荻の夢　同
秋しらぬいのちかな
ある日名ハこの松風の音　同
第ハ細柳ハ髪を時風風　同
右の二句大きなし
行月よありくとも万の声
雪まし柿やまつあの人
風そへゆれ葉からぬ花や梢あき人

廉の高をうりさは屋の姉の山
うりさとやのねうひなし
あ〻れ地のあや織うるあはせ
後をくるはとまれたをとる姉くるおく
いはるるるるるおみてうくて國ゝし
祇園ふるて久しき松の雪
山伯高八坪て久しきまと住のを宇御ろをされ
うてるて山伯いうのれは住しきまし
吉日やうりの姉の家ろを
山りうてを家ゝ りりと宇ふれの高を
はりてふるくりるをうて家をんろ祇くいう
ゆるるるるるるる

駕かいつくの山は景なるく
服前くはうるはるるるるれを高るし
山家生やをう住拾しる山
家ろるた人祇はりて
高祇ふふいくは張ろて
ふるは日をうるくて十日を幾日とはるる
いはくるも志るめ屋ろ高書
をとうけ高うるるるるるし
十九 住るるりの川の国ゝ
十八 くる稼ゝ牡丹ふる松の雪
十六 ゆりうを吉高ふむ記
十五 月うを山の雪ゆりる

暇日

君ゝ恋りほとゝきすとハほとゝきすの
卯の花や雪や卯の花

対して作ゝる

名をたゝぬ小草花ハ
さゝ生ゝれの稚乃海
智ゝ乃き神をえゝ
稚ものゝ
神ゝ多智を花の智を
孫ゝ麿ゝ吉ゝ吉ゝ家ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

卯の花ハ
ゝも耐ゝ
ゝ

一 述懐の歌 独吟

時分柄の俗意を名ゝ
月や〻〻年越さうとの
哥ハ
の
中ゝ
述懐の

一 本哥表くれハ紀ろんとおすふんすそ
此人の宿しかくしらられ
桜狩の題ありハ順あひさ川みえあ面あひさ川とし
行ましや花みあえろしと雲の雪
西三條実隆上房時あそりられしとぞ
おま人とききしくてき一とし
良の言を行ひさ忘れし付しれさう

一 古文本説おし題るの順ハ手とし〈ハ雲をとつつ跡
とりひ一み言ふをうしくれ松ひといひくつとも雲
雲みえふの事詠まうく心えて順説まつし
相のしみ行いて人多や丁の事
それハ序を鳳凰さして〈ハまき我躰ハ鳳凰なし
相のとおちって面白記けるに行いて人多ハ

一 了あき鳳凰ハ旅人の時出る瑞なき桔梗相て付
らされハすまれ走られハ順て鳳凰の名を付へ紀
うし祇ろさらるやされかられた時あるハ丁
をを参て走てあるられハ丁あ詞とし詠けるて
拘へしとありけれた
村爺過散煩風の山
寄付行きしとよしとやされしとし
時まて咲やられ梅の花
乃木々草枯果てる時咲花ハうたえけれると
仕立てうるなし
香行へいくさえみ出めて時
なれらも梅さ加ししつけられ多きくる気

一　雪ぞの内に咲花ハうき人けうやと仕たるし
第三ハてとゝとやしにるハあらしらうしくら人をと
とやりしるもよくいいりみも長きよく幽玄躰
なと加根とせり佗寂るにより第三の句持たる
串ありなくへたいひそてきる寂句れしてた
第三ハ景字持り收へし

桜折りほく　雪とゝ夕霧ほ
山本の川そひ柳風吹て

又

雪ハりきみゝ白雪山のも
白妙ニ家もある夕朝暁く
是等ハ長ありて殊帯收る句し

発句ハ霰のおもしろうし
鶯憐(?)の前哉上ニ第三ニて
一句のおもしろうし　かう見えると付所一字も
あやうしす前とくそ
宗祇の執談ニ云上文の建寄ハ他人の中よゆるの
さゝしたる日のハ観見の中ならずきらふとしとや
はれしるそれと是哉ニをは
三塚寄山にや霧ほるらん
霞たる紀の(?)は(?)て夕暁く
ときも川風井ゝのゝけそは京
是山と寺も云花ニ桜夕暁く山ま紀
いつれも花人妙也観哉るやありし人文風のたゝ

然るにこの原と升てハ心ちも元人のしもとも心ち
もいろひかれハ他人の中にれミやけら人に近へち
萬載ニ雑談ニ中古ニ連哥ハ拘を借て構て借ニつ
むしろ當世のハまへ法しむへしとかくにしきを秋云
夕暮ハう聊小さも心得く法かて
月は出ぬるあいの法
夏されもむかふ月のあり法ル
かゝ夕暮ニさんにかくさむるゝ月ニおりぬ入おの法ありて借
あるく人の文夕暮比夏うつりしに暁ニ出ぬる月出て歴
むかしまへやうなしあさよりて夕暮ニ出しく夕暮ぞよ
よおもいなるやうおふさをまへ法くとニハあり寄
いんのかつまへ好くそやへうしん

春依ハ之文的は連哥らり無文的らう大事的りかて
やわれしとらねことふ急すなるに
私ふりもさしさも所く
り記とよぬ論諭かいそ公の形く
はりめする論諭かいその好ける事
う法も見むかしと云うり記とよぬ論諭名のこ出て
私とえ人あり景ハ通して也やけつ人さま私う
又論諭か形の京家何ニ見さ法徒ハあり新と
いろ人ゝるほうこをあしらめはそ可ん也とえ見下と
ハふとも見むも文ありし又引ニ花ぬ景ふされて出ら
もしらぬ私かぬ角とあまへうんし
定家の哥さ

足洗屋敷をかりて
國の中ゝ やの秋 拾月 吉

ゝゝも 元禄 ゝの別 紀事 ゝを
ゝ之へ ゝ人 ゝ 又 祇
宗長の 之中道 ゝ 下 ゝの 句 ゝ ゝ
ゝのあり ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
風を 都 ゝ ゝ ゝ 霞む 沈
けてをけ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
花や ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ 都 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

一 或人宗祇に問ひて連歌は[illegible]れ
しかるべきや時にとりてのち連歌は
先哲の句を集め[illegible]をけんを
[illegible]の句みあるべ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

一

或人宗長丹連歌の事[illegible]

[illegible]

[illegible]

中古南北の別無者

梅やはく[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たり一ぐもみりあるをかきりあるべきことにはら
ばるる事なれば元吉の時長年女事ありあるべき
ものてれば一ぐのいくさるの事しる奇の記事元もんを
引ちらし家ハ吉の事ハ位ハ初ものいをとけりきりあるべ
ことを少月事ハ位月ときしるべくをやはべん

かきめて法ばく記月めれば事
秘法なる家ぬの后の遠はらう
秋雪ふ法を記為帰る

新古はるるる吉はの事のうはるさへ名あて法
秘法の月と吉を紀をしるしたるとうもて
月いるるれみしを文月者いるるて月はる
ものを秋きるの上はしを吉を引ちるる炮常ち
るべいるを月ふかるる事の行ちを行を古奇の
ものりみ行べる

此一巻ハ法服紀也自筆月別一字も違へ
書写仕也

洲清連奇の四杯仕事ものを吉連奇ものを遠ふ事
いさるれし洲清ハ奇連清ハいれ行裏所
事年名鼓宝戒名又ハ初の子をハ名事しんを
遠ものを巻名仕紀中れしをハいるさ清
ものをみれしてを一白をををよ仕人を
杯人をはるるる月ハさるあ家法一事北
行大事をしるへ記物ハいをハ人をよるる
ものをあるる内者を成月なれ四紀きへをを
人ハるるひる紀上月ものを行をし中るるもの

[illegible]

大事[illegible]なる中にも[illegible]の連帝も[illegible]連帝も時[illegible]

[illegible]かるものハ[illegible]の世中を

[illegible]ハ[illegible]へし[illegible]を

[illegible]別[illegible]を分中ハ[illegible]

立圓 判在

昭和九年八月十六日

[illegible]